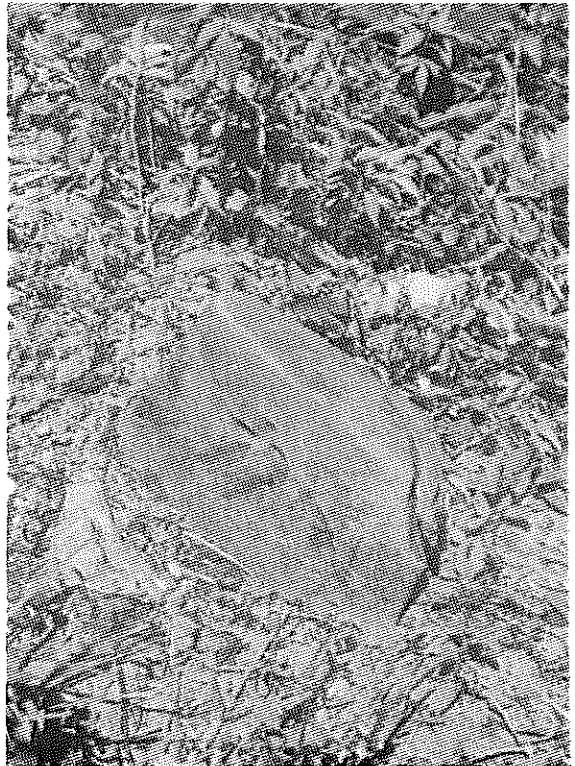


Title	[グラビア] 新発見のハル石(印部石) : 近世琉球の土地測量資料
Author(s)	長間, 安彦
Citation	浦添市立図書館紀要 = Bulletin of the Urasoe City Library(2)
Issue Date	1990-12-25
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12001/20367
Rights	浦添市立図書館

今年の8月、北谷町字桑江の谷間の畑地の一角に、周辺は人頭大の琉球石灰岩ではぼ円形状に囲われた盛土中から、約17センチほど頭部を出したニービ石が発見された。「か」と彫り印されたその石は、明らかにハル石（印部石）である。大部分が土中に埋もれているので、原名（ハルナー、小字名）の文字や碑全体の寸法は確認されてはいない。この印部石は安里進氏（浦添市美術館学芸課長）によって発見されたが、『北谷間切桑江村竿入帳』（1750年、寛延3年）など、検地に伴って作成された、いわゆる近世の土地（登記）台帳に表記された方位（例：ひら原お之印より子下小間少下ニ寄四拾間）をパソコンによって分析、さらに測量図を作成して現地調査をするという、古文書解読と考古学の踏査方法を加味した研究の成果である。このことは、近世琉球期の「竿入帳」記載の測量明示がいかに正確であったかが証明されたわけである。

北谷町字桑江に所在したハル石の発見以前に、同様のハル石発見及び収集がなされていない訳ではない。沖縄県地域史協議会は、第2回沖縄県地域史まつり（1987年11月20日～21日、浦添市民会館で開催）で、各市町村収集（情報）の「印部土手石（仮称『ハル石』一覧）」を表（小冊子）にし、また、一部原物資料の展示を行ない、その研究・保存を呼び掛けている。さらに、『地域と文化』33号に掲載された中村誠司・仲原弘哲共著の「羽地間切竿入帳の分析、実地的検討に向けて」、同書34号掲載の安里進著「近世羽地間切の村と耕地——『羽地間切竿入帳』の考古学的検討」、同書55号掲載の安里進著「近世桑江村における稲作の二形態と系譜——『北谷間切桑江村竿入帳』の分析から」、同書29・30合併号掲載の仲間勇栄著「『伊平屋島山竿入帳』について」等、優れた論文が発表されている。



〈写真1 北谷町桑江の印部石〉

ところで、印部石の設置の時代はいつであろうか、その設置理由はどうか。竿入帳に「印部石」を指す「山田原か之印……」等が表記されることから田畑の竿入に伴って設置されたものであることが理解されよう。つまり、検地の施行である。

琉球（沖縄）に検地が実施されたのは、1609年（慶長14）の「琉球進攻」後、翌年9月から8ヶ月かけて



〈写真2 「うるくすく原 於」〉



〈写真3 「たくし原 於」〉

行われた、いわゆる「慶長検地」が最初である。

この検地は、豊臣政権が幕藩体制社会を確立すべき、支配力の根幹となるべく「石高制」の成立のため、全国の各藩（領地）に行なった「太閤検地」法を基本的にするが、この検地制度は関ヶ原合戦（1600年）後も、徳川政権（江戸幕府）に引き継がれ、家康によって島津氏の属国（領地）として下賜された「琉球王国」にも、「太閤検地」法が実施されたのである。

徳川幕府の慶安二年検地条目（1649年）に、「縄先打の者は境界に心を入れ塚を築き、紛れないようにする」ことが明記されている。さらに、延宝五年（1677年）・貞享三年（1686年）検地条目に「地面の入り組地へは目印を立てる」等と記される。条目に記された「塚を築く」「目印」が印部石に類する指示なのかは、判然としない。

島袋源七文庫17『断片綴』中の「印土手并針図之事」、仲吉朝助編『琉球産業制度史料』収録の「乾隆四年未 御支配方仰渡覚 大里間切」「田地奉行規模帳」等の史料によると、乾隆2～同15年（1737～50、元文2～寛延3）、琉球で実施された元文検地（乾隆の大支配ともいう）の際三角法の測量で確認した田畑の地積不明などの時は、〈印土手〉に立ち置かれ〈いろは文字〉が彫られた〈印石〉によって、札すことが、御支配奉行から間切検者、地頭代に申し渡されている。

この〈印石〉は印部石、印部土手石とも表記され、1カ間切に〈印土手〉は200～300カ所もあると記される。いわゆる、現在の土地測量事業に伴って設置される「図根点」に相応するものといえる。

1989年までに浦添市内で発見されている印部石は8基である。写真2は沢岬178に設置され、今年10月に発見された写真3は同字111で発見された。この2基の石から知れることは、現在の小字沢岬（たくし）原が、近世期1750年代ころは「うるくすく」「たくし」の2小地名に分区されていたという史実が分かることである。印部石はただ単に検地資料というだけでなく、失われた地名の研究資料としての価値も大いにあるといえる。

（長 間 安 彦）